



景観

LANDSCAPE

KEIKAN

上越市景観形成情報誌「景観」第3号

〒943-8601 新潟県上越市木田1丁目1番3号 TEL 0255-26-5111 FAX 0255-26-6112

この情報誌は再生紙を使用しています。

景観

LANDSCAPE

KEIKAN

上越人のDNAを探る

上越市発足30周年特別企画 雁木のつくる美しい人びと

調音
第6回上越市景観デザイン賞

私だけが知っている、とっておきの場所
ぶち景観みつけた

外国の目からみた上越の食生活
My favorite Joetsu

活動レポート
zizo(地域)ノ森ノ雁木新聞 雁木の歌

感じてください。まろの色。ノボクたち地名探偵団ノ
まちは舞台、みんなが主役ノ景観エトセトラノ読者より

上越市
景観形成情報誌
2001

No.3

上越市



昭和40年頃の本町通り。時代と人の流れと共に雁木も姿を変えていく。



特 別 企 画

雁木のつくる 美しい人びと

The beautiful people who make Gangi

この歌が好きだ。桜月夜の美しさに華やく心、やわらかくなって逢う人逢う人美しく見える。ふわっと匂い立つような、時にかたくなこの浮き世での、夢のように優しいひとときを描いたものとして、この歌は深く私の心に染み込む。

高田の街を歩くと、ふとした拍子にこの歌が頭をよぎることがある。逢う人逢う人、なぜだかとても近い人に見える、その顔が懐かしく涙ぐましいほどの美しさに胸に迫る。おおげさなほどの感傷的な想い。

ある日ふと気付いた。これは雁木によるものではないだろうか？

清水へ

祇園をよぎる桜月夜

こよひ逢ふ人

みななうつくしき

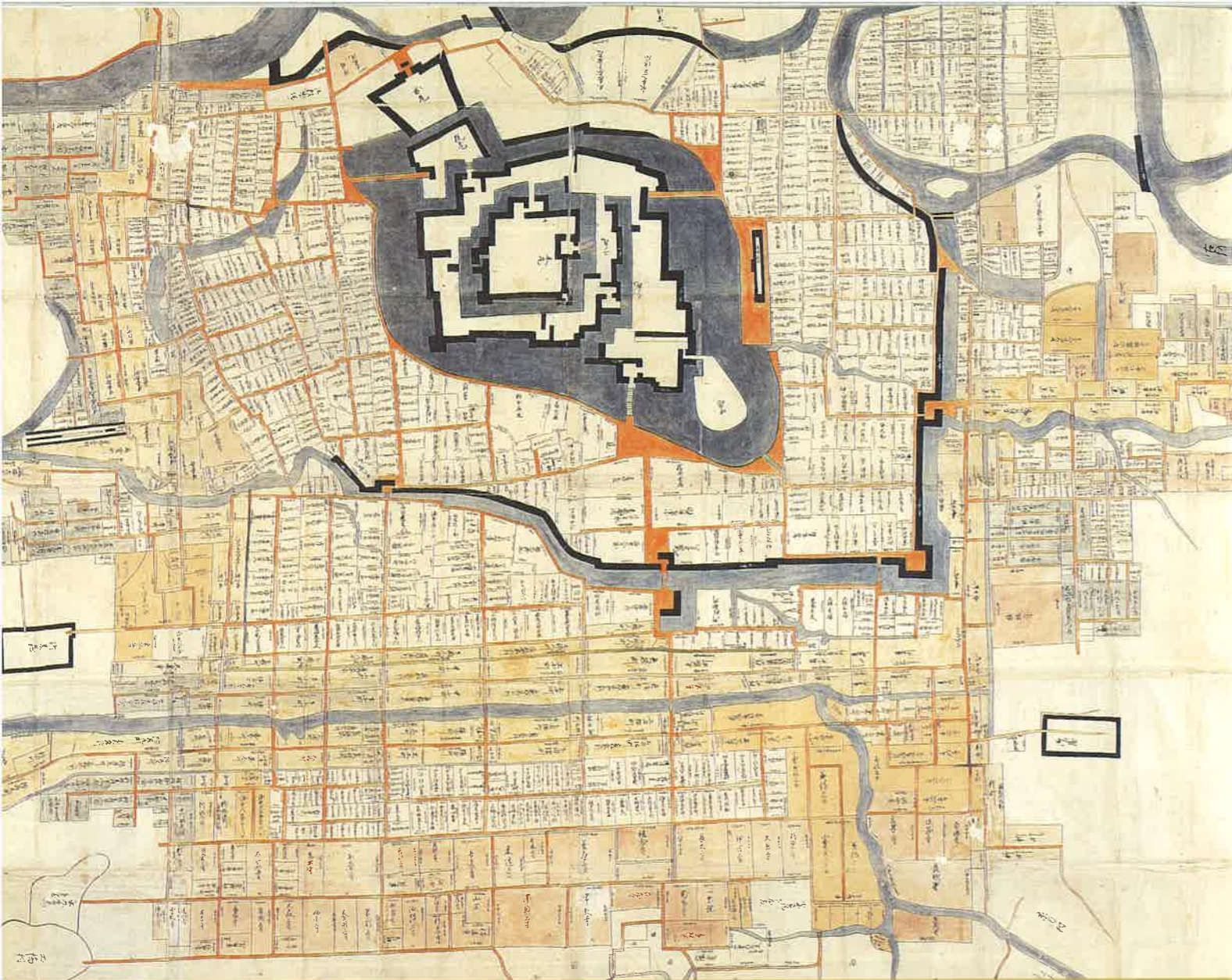
《与謝野晶子》

「桜月夜」は半ば闇だ。目を遠くへ凝らそうとすれば、いつのまにか視線は闇にからめとられて、かわりに暗闇を背景とした人々の顔が、月明かりにほんやりと浮かび上がる。雁木はそれと同質の闇を作る。雁木は空間をささきり、人々の視線を散乱させないことよって、その中にあるものをより浮かび上がらせる、闇のような役割を果たしているのだ。

閉ざされた空間の中で、人々はすれ違うために近寄らなくてはならない。一方が立ち止まり、あるいは歩をゆるめ、道をゆるする。もう一方は相手の顔を見つめ、微笑み、礼を言い、互いの気持が一瞬灯火のように輝く。そして二人は互いに立ち去り、雁木だけが何もなかったかのように場を静かに保っている。

雁木はその空間で人々を近しくし、ささやかなドラマを作る。そしてその小さな道で、人々は互いに大きく認めあい、絆を結び、そこで逢う人を「みななうつくし」と思う。雁木は懐ましく、何も語りはしないけれど、この街の人々の心に大きな影響を与えてきたのだろう。そう考えるとき、私の心もまた冒頭の歌のように、やわらかく華やくのだ。

魚家明子



高田城下町地図：寛文期

雁木 ことはじめ

The beautiful people who make Gangi

The beginning of the Gangi

上越市の代表的な景観「雁木」。特徴ある景観として市外、国外の人から賞賛を受けています。まずこの雁木の歴史をひもといてみましょう。

雁木 誕生

高田は慶長19(1614)年の築城以来、城下の整備が行われてきました。松平光長公の時代、寛文5(1665)年冬、高田地震に襲われ、城と町並みが崩壊しました。それ以後、城下の北・西・南の外郭三方に、密接する軒を連ねた雪中通路として「雁木通り」が造られたと言われています。奥州街道の起点である関川にかかる稲田橋は、近世には城下唯一の許可橋であり、その為、城下外の集落であっても、古くから「造り込み雁木」が在ったと言われています。現在も稲田から四ヶ所・戸野目に至る旧道沿いに、「雁木通り」が連なってい

ます。鈴木牧之の「北越雪譜」(1835-40年刊行)の中でも、越後高田城下の繁栄と、連続する雁木の様子が語られています。最盛期の延長は17.9 kmにおよび、明治42(1909)年の「雁木取り払い」県令もごく僅かにしか実行されませんでした。

直江津の雁木は、江戸中期より始まり、最盛期には旧本町・福永町・浜町の両側軒並で、延べ4.6 kmに及んでいましたが、度重なる大火により焼失して、現在はわずかにその姿を残しています。

(文化財ネットワーク21 清水恵一)

(参考文献:「雁木通りの地理学的研究」氏家武著・古今書院発行1998年)

雁木を育てた心

雁木は雪深い地方の生活から編み出された工夫の産物である。それはおのおのの家屋のなかの生活を保護するシェルターであり、またほぼ同規模・同型式のものが連続して並ぶことによって、そしてそれぞれの家が互にその空間を他にも提供し合うことによって、町全体が大きな利益を得るといえる。これを文化と呼ぶのは、雁木という特殊な構造物が孤立してあるのではなく、住居建築の全体、敷地、道路交通、町の自治の機構や慣習などと分かちがたく結びついており、そうした町全体の生活の象徴という意味をになっているからである。雁木がまだ現在でも生きているということは、その構造物だけが単独に残ったのではなく、これを支える生活のシステムが全体として現在でも有効に働いているということにほかならない。したがって、単に雁木だけを取り出してその存否を論ずるこ

とはできないのである。

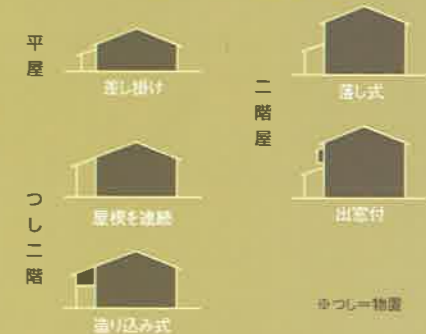
しかしながら、明治以後の近代化のなかで雁木は大きな試練を迎えた。とくに戦後の高度成長期には、生活の基盤や都市の機構あるいは技術が徹底的に変化したために、古い都市の生活基盤に支えられた多くの家屋や都市景観が消え失せた。実際、多くの町で雁木はすでに完全に、またはほとんど消滅している。高田もまた他の町と同様に危機下におかれたのであったが、しかしこの町には依然として雁木の連続が見られる。これはなぜであろうか。高田では雁木をつくる慣行が戦後も受け継がれ、ある意味ではむしろ強化された感がある。これを単に近代化から取り残された古いものの残滓と見るのは正しい見方ではないと考える。高田の雁木は市民の強い意志の力で、残るべくして残ったのである。

(「越後高田の雁木」昭和57年3月発行/新潟県上越市教育委員会/東京大学工学部建築史研究室編集より一部抜粋)

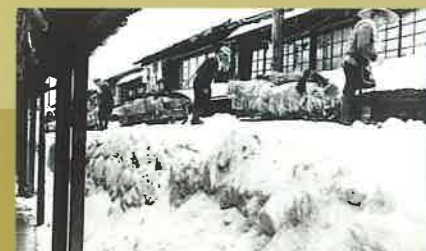


呉服町のにぎわい(年代不明)。

雁木の類型



雪トヨを利用した除雪の様子。収納は雁木の屋根裏に(年代不明)。



冬の本町街の物資輸送(年代不明)。

各地の雁木



秋が深まると見られた雁木下につるされた干し大根(年代不明)。



東本町に住んでいた醫女さん達。

「雁木」というと豪雪地域にあるものと連想しがちですが、そればかりではありません。町が成立する機能によっても発生し、異なった呼び方がされています。県内では上越市や長岡市、村松町などの城下町や、新津市、栃尾市、出雲崎町、小須戸町、津川町などの宿場町では、「雁木」(津川では独特に「とんぼ」と呼ばれています。山形県に入ると、米沢市、山形市、鶴岡市などの城下町、酒田市、尾花沢市などの宿場町では「こまや」と呼ばれています。東北地方の弘前市、盛岡市、黒石市、角館市などの城下町、一戸町、遠野町、北上市などの市場町は、「小

見世」・「こもへ」と呼ばれています。これはどうしてなのでしょう? 「雁木通り」を持つ町は、京文化の繋がりを持つ城下町と、昔から農家に庇(雁木と呼んでいた)を持っていたため、農村型の宿場町がこのように呼ばれていたと言われています。これに対し、「小見世通り」は江戸文化の影響を受けた城下町や市場町のような商業中心の地域と呼ばれていたといわれています。

歴史の中で各地の「雁木通り」や「小見世通り」は次々に消えていってしまいました。でも私たち上越市はまだ日本一の長さを残しています。三百数十年の歴史は永く将来に繋げていきたいものです。(清水恵一)

小見世

特集

雁木のつくる美しい人びと



稲田
inada



大町
omachi



夏の仕事場には、よく小学生が見学に来ます。雁木は、雪でも雨でもつかけて行き来でき、こんな便利なものはありませんね。《稲田◎(有)金沢商店さん》◆奥まで22間と稲田で一番の長さを誇る家。ここでは住民の傘となる雁木は、周りの許可なくしてはやみくもに取り外せないとのこと。

雁木は、あまりにも身近で取り立てて考えた事はありません。昔はバスが通っていたので、車が入ってこないという点は、一番安心できますね。夏はひさしのかわりになります。駅前の雁木は、高田の雁木のイメージとは少し違うと思う。《稲田◎綿貫畳屋さん》◆実直そうな御主人と、しっかりした考えの奥様。稲田は、祭りなどを通してまち作りを積極的に行っているのだと実感させられた。

以前は庄屋で間口は14間と広く、先代がずっとその広さを守り通してきました。この辺は、水が悪く昔ほどの家も水瓶をもっていったんです。雁木は、これからも残していくべきですね。《稲田◎金井慶久さん》◆懐かしそうに語る奥様もまた、その務めを果たそうという決意が感じられる。高い天井と地震でもびくともしなかった太い大黒柱が特徴的。

いわば地域のコミュニティの場としての意識が強い雁木は、行政が上から指導して作るものではない。時代と共に変化していく必要があります。《稲田◎(有)丸山昌治商店さん》◆店の上に掲げられた「はくせい」の文字に惹かれるようにして中に入ると、予想外に若い4代目店主の顔。聞けば、まちの消防の活動をしていらっしゃるとのこと。雁木は、と熱く語る御主人にこれからの稲田の心意気を感じた。

工夫をしない商店街がさびれていくのは仕方がないかもしれませんが、このドアは板張りで見えないのは、自分の意志で、目的をもって入ってほしいから。《本町◎WESTERN RIVER》◆バイク好き、硬派なこの店のオーナーは上越出身、20代で都会からUターンして本町に店を構えた。ポリシーを持った若々しい店である。

少し落ち着いた年齢の人もしっかり会話をしながらリーズナブルに多国籍料理を楽しんで欲しい。《仲町◎ポッチャリーノエキゾチックさん》◆仲町通りに面し、スポットライトに照らされ、ちょっと一風変わった雰囲気の入口ドアを開けると中はアジアテイスト。チベットの手描き曼荼羅図を飾り、カウンターやイスの飾りつけなどをして独特の雰囲気をつくっている。都会からUターンした若い経営者は、この他にも若者が楽しめる店など3店舗を持つ。

買う人の時間の流れを尊重し、なれなれしく声をかけることはありません。ゆとりを持って仕事をしたいので、ここ上越での仕事を選びました。《仲町◎FLYING AIRSさん》◆仲町に不思議な雰囲気の店構え。隠れ家的な店内のおしゃれなディスプレイ。無理に商品をすすめることはない。ここへ来て、話したい人はいつでも話しに来ていい、ただ雰囲気浸るだけでもいい、と心の癒しの場のような。

雨や雪の日、雁木は便利。時々酔っぱらいが寝てますよね(笑)。《仲町◎はとやさん》◆雁木のそうしたふところの深さが結構お気に入りを見た。店内に入るとあったかい雰囲気が包み込み、マスターの人柄とおいしい料理にいつも人気の店だ。壁に掛かったワインリストが、こだわりの感じさせる。

昔、県道にある銀杏の木にかけて日よけを作ってくれるよう、先代が直談判に行ったんですが、そこがどうもこの雁木のはしりらしいのです。《仲町◎紅屋さん》◆ご主人と和服を召されたお母さんが対応してくださった。伝統ある和菓子のお店で、店内はすっきりと清潔で明るく、照明を和紙風のものにし工夫している。雁木にあわせて屋根を大和葺にするなど、本当にこのまちの景観を大切に思っておられるようだ。

建て替えることはしなくなりました。できるだけ今の時代に合わせた作り替えも同時に考え、建築当時の趣を残した造りにしました。《本町◎きもの小川さん》◆昭和10年の大火の後に作り替えた呉服屋。10年ほど前に雁木を含めお店を改築した。雁木の町並みで育った思い入れは深い。

奥は直しても高窓のある座敷から格子戸のある雁木は絶対に直しません。《大町◎柴田貞夫さん》◆力強く語る口調は雁木に対する熱い思いの表れ。木の戸をあけるとそこはちょっとしたミニギャラリーのように写真や絵を飾ってある。世界的にも著名な建築家の原広司氏が、親戚でもある柴田さん宅を訪れたとき、高窓に続く吹き抜けを見上げ、「おー」と驚きの声をあげられたそう。そういえば原さんの設計された京都駅は天に続くような見上げる空間があり、もしかしてここがヒントになったのかも勝手に想像してしまっただけ。



The beautiful people who make Gangi

特集

雁木のつくも美しい人びと

雁木

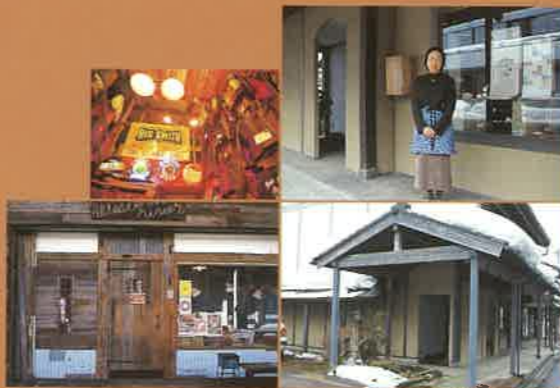
The people who live with Gangi と暮らす人びと

◆interview

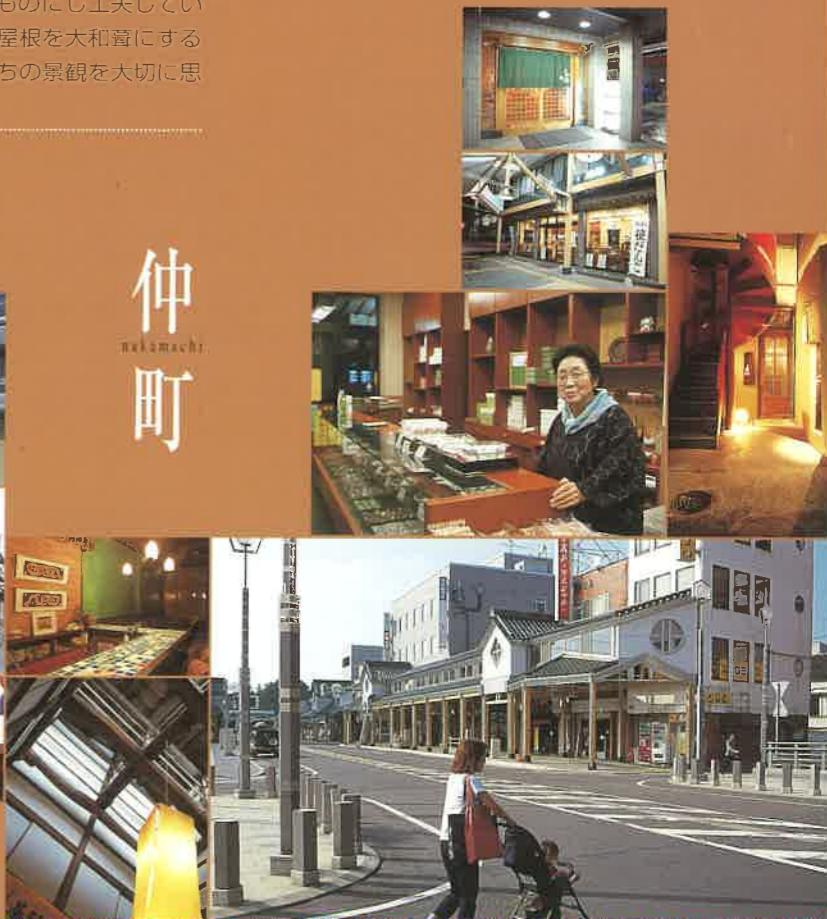
雁木で伝統ある店を受け継ぐ人、昔のままの格子戸を守る人、そして雁木で新しい風を起こそうとする人など、雁木と関わる人々に雁木での暮らしについて聞いてみました。



仲町
nakamachi



本町
honcho





高野味噌醤油醸造店の土蔵(北本町)



雁木と暮らす人びと

The people who live with Gangi

◆interview

雪下駄づくりの専門は私だけ、一代限りですよ。雁木の景観は昔のまま残して欲しい、ハイカラなものはちょっとねえ…。《東本町◎竹田亀治さん》◆祖父と父は大工、作業場兼自宅は修繕を重ねながらも築200年ほどになる。雁木との相性を考え、屋内には土間が残されている。

せつかくのよい景観がみんなバラバラに直してあるのは良くない。古いものを上手に直して、行ってみたいと思わせる景観を残して欲しいですね。《東本町◎渡辺裕子さん》◆15年前が最後の出番であった雪トヨが雁木の下に掛けられていた。歴史の長い城下町への想いを感じた。

ワタシは生まれも育ちも大阪です。雪はキレイだけど、高田は住めば都だね。《南本町◎朝日湯・間島光子さん》◆上越で残り2軒のうちの1軒となった大正時代から営業している銭湯。市民のコミュニケーションの場だ。高田へ移り住んで40年、番台に座る間島さんの話し言葉から大阪での生まれ育ちは感じない。

小さい頃、雁木は暗いというイメージでした。雪が積もると光が入ってこないし、雪の階段を上がって雪ぞりで商品を運んだ思い出があります。これからは、雁木が残って建物残らずでは意味がない。でも住む人にとっては昔の建物は住み難さがあるんですよ。地域独特の雁木を今更新しく作るのは無理としても、あるものをどう残していくか、あるいはどう活用するかを考えることが大切ですね。《南本町◎高橋孫左衛門さん》◆創業378年、当代で14代目になる老舗のあめ屋。最近の小雪傾向で雁木・雪・高田というキーワードは失われつつあると御主人は語る。

生まれたのは雁木のある町屋から少しはずれたところ。小さい頃、雁木の通りは賑わいがあり、どこか文化の香りがしたもんです。今、雁木を建てるにも、人のために…とかいうのではなく、ごく当たり前にあるものじゃないんですか。《南本町◎金魚屋・鷹見照夫さん》◆金魚屋として高田に残った1軒の御主人は、普段自転車で散策するのが好きなのだそう。

少年時代は、砂山といわれた起伏のあるこの土地で友達と雁木を走り回りました。今は子供が遊べる場所と緑が少ないですね。《中央◎古川旅館さん》◆創業100年を越す老舗の宿のあるじは美人のおかみさんを持つ39才。市内のお気に入りスポットは、お嬢ちゃんに行く高田公園の四季折々の光景という。

私道と公道の認識が曖昧なため、夜な夜な酔っぱらいがケンカをしたり、ガラスを割ったりと被害を被っています。こんなことでは、雁木はなくなっても仕方ないことかもしれません。《西本町◎坂井三蔵さん》◆雁木は決して、ハタから見ると語るものではないと思い知らされた。明治に建てられたお宅は、天井が高くそこから明かりが採れるような独特の造り。

中央

chuo



特集

雁木のつくり手美しい人びと



北本町

kitahoncho



南本町

minamihoncho



地元の設計士からも保存して欲しいといわれています。毎年50枚を越す瓦屋根のふき替えには、やはり行政の協力が必要と感じます。《中央◎小林歯科医院さん》◆ざっと100年は経つであろう。大岡越前の伊織先生が出てきそうな見事な付まい。よくよく聞けば、昔はいたご場といわれる大きな材木問屋だったというから、その格子戸の造りの確かさも頷ける。また、木と昔のガラス戸の雰囲気、趣味のお花とアンティークの家具で調和させる奥様のセンスには脱帽…。

古来の大釜を使用し自然発酵させた製法も、土蔵と共に引き継いできています。《北本町◎飯塚さん》◆150年は経っているという土蔵が奥にあり、醤油の香ばしいにおいがとても懐かしい。弘化元年に初代松四郎さんが味噌醤油の醸造を始め、以来受け継がれた御主人は5代目。上越市の雁木を全国向けに紹介するときに、しばしばこのお宅の雁木が使われる。白変した戸を直すにもお金がないからと静かに微笑む奥様。何とか守っていきたい歴史のあるお宅だ。

子どもの通路にも安全で濡れない雁木は絶対いいですね。《北本町◎飯塚さん》◆雁木のないところから嫁いできた奥様は言う。新築のしかもコンクリート打ち放しのモダンな家なのに、なぜか周りに馴染んでいて飛び抜けた印象がない。屋根の高さを周りとそろえ、雁木の後ろに前庭をつくったすてきなお宅。

●雁木通りの取材を終えて…

いくつかのインタビューで、ほとんどの方が口をそろえて雁木の良さを言われましたが、中には共通の悩みとして、町屋は暗い、車庫が家の裏側なので大雪になると出られなくなるなどの声もありました。実際雁木をつくらないで新築したお宅にもインタビューしましたが、「車を前において、光をふんだんに取りたかったのですね」と話されていました。裏道の除雪問題と採光をクリアすることが雁木存続の条件の一つであるようです。(編)

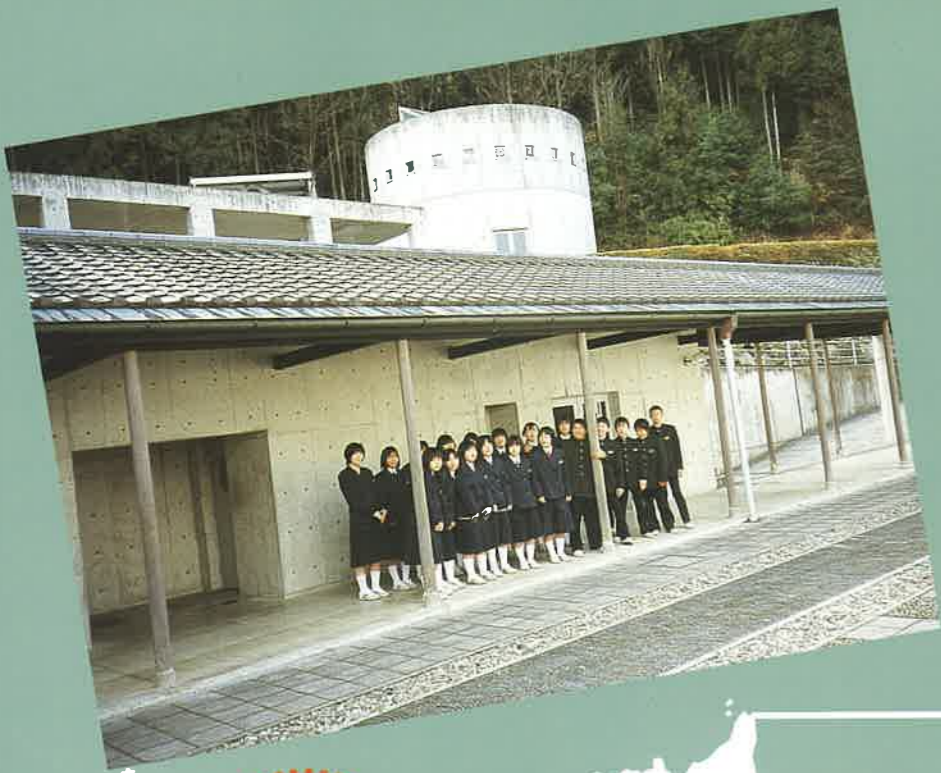
交番所長に聞く「雁木と街の安全について」

上越南警察署南本町交番所長/長谷川久司さん

—雁木は街の安全のために役立っていると考えますか？
特に冬期間は歩行者の安全に役立っていると思います。雨の日など、心無い自転車乗りの方が雁木通りを通行しているのを見かけますが、危険ですのでやめてもらいたいと思います。
—警ら中何か気づくことはありますか？
信号機のない横断歩道では、歩行者に優

しい運転をして欲しいと思います。横断のため立っている人を見かけますが、止まってくれる自動車はまずありません。
—ちょうど雁木の切れ間に交番(南本町)がありますが、交番にも雁木があるよと思いますか？
交番の機能からは、見通しを妨げかねない雁木はないほうが良いと思います。
—景観上雁木はあったほうがよいと思いますか(好きですか)？
雁木は好きです。もう少し整備して残して欲しいと思います。





愛媛県喜多郡内子町は、江戸時代から明治期のまちなみが残っています。特に八日市・護国地区では百軒を越える歴史的な建造物が緩い坂道に沿って軒を連ね、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されています。浅黄色と白漆喰で塗り込められた重厚な外壁が特徴です。ハゼの木から採取される木蠟の専売で財を成した旧家や「町屋資料館」「商いと暮らし資料館」などが公開されています。また、大正5年に建てられた芝居小屋「内子座」は昭和60年に修復されて以来、人気を博して興業も盛んに行われています。四国の西南部、温暖な風土と町の隆盛の歴史がうかがい知れます。



旅した雁木

伝播する雁木の遺伝子

Well traveled Gangi

雁木は古くから雪との生活の中で形づくられてきましたが、瀬戸内海のあたいたかい地にも雁木を見つけました。たとえ、雪の少ない土地でも人々の暮らしに寄り添うような雁木をあらためて見つめてみました。

文学と建築の場所 — 社会的な景観

……原広司による中学校の建築が進行している現場で経験した、不思議な思いについて書きたい。冬曇りの午後だったが、川に沿った古くからの町筋を歩いて、新しく架けられた橋を渡る。こうして四国を縦につ

らぬ幹線道路に結ぶ新しい道が造られている川向この土地を眼にすると、この数年、村に帰省するたびに抱く感情がある。森の中の川に沿った地形が、なにか妙に平べったい感じの、機械的で巨大な力によって無造作に破壊されているのである。破壊が始まってみると、自分の生まれ育った場所などなんと小さく脆いかたまりとしての

地形にすぎなかったかと興ざめる思いにもなった。この土地のどこに、いかなる他のものとも換えがたいもの、ここ独自の破壊されがたいものがあらわれているのだろうか？

原広司が世界の集落をめぐって達成した建築家の理論にあわせて、後に発表された『集落の教え』は思想的な人生の教本と呼ぶにたるものだ。〈風景に社会が現れる。風景に自然の願望や悲しみが現れる。〉そして建築家自身が次のように解説している。〈集落によって、風景が整えられる。風景は社会化された自然の景観であり、共同体の秩序の構想の実現があらわになる。このとき、自然の潜在力を活用するから、自然の語りかけに耳を澄ます態度が取られる。〉原広司の解説にそくしているなら、ここに新しく建築された中学校を先頭にした集落が、村の風景を新しく整えているのである。破壊されたものを回復させる仕方である。その中学校を中心にした風景が、新しい意識において総合されなおした、つまり新しく社会化された自然の景観を村にもたらしているのである。……

季刊GA JAPAN 01 (1992年発行 エーディーエー・エディタ・トーキョー) 大江健三郎「新建築が発掘される」より一部抜粋



大瀬中学校から届いた
生徒からの便り
一部抜粋

校舎視察で大瀬中学校を見に来られた方が、「こんなにすばらしい校舎を見たことがないよ。」言ってくださりうれしかった。(向井好さん)

この校舎の一つひとつの形に大瀬の風景がイメージされていて、この大瀬とずいぶん似ています。(大森香さん)

校舎の特徴は、まず、廊下に壁がないことです。冬は寒いですが夏は風通しがよく、すずしいです。学校全体が緑に囲まれていることも特徴のひとつです。(寺岡弥生さん)

この校舎で勉強に励むことができるのを、誇りに思っています。そのため、一式ひとりがいつまでもこの校舎をきれいにしようという気持ちを持っています。(井上智之さん)

校舎で工夫してある点は、壁に埋め込んだ時計や、寒さが厳しいため雁木がつけられているところです。冬はとても過ごしやすく、コンクリートが多いので、夏はひんやりとしています。(森本晃宇さん)



「雁木」を知ったのは愛媛・内子町でのことだった。

杉元政光 (フリーライター)

雁木という言葉を始めに知ったのは、7年ほど前に訪れた愛媛県内子町立大瀬中学校でのことだった。町並保存運動で知られる内子町は、ノーベル文学賞を受賞した作家・大江健三郎氏の出身地でもある。大瀬中はその大江氏の母校だ。

大瀬中には高知県在住の建築家・大谷晴朗氏と2人でいった。大谷氏は大瀬中を設計した建築家・原広司氏の教え子の一人である。その大谷氏が恩師の作品に出てくる渡り廊下を見てほつりと言ったのが「雁木」だった。

「先生の奥さんの故郷・上越市高田に行くと思えるよ」と大谷さんは教えてくれた。

昨年、私はその上越市に1年近く住む

ことになり、雁木の下を幾度となく歩いた。歩くたびに先人の知恵と工夫に頭が下がった。なるほど「高田は雪の下」だったのだ。

なお、景観デザイン室で原氏に確認したところ、大瀬中の渡り廊下は直接的に「雁木」を意識されたものではないとのこと。残念な気もしたが、これはチャンスだ。上越市の小中学校のデザインに「雁木」を取り込めばいいのである。

Interview

——「完成した中学校の写真から、起伏の多い四国の山並みと針葉樹の森に抱かれているように見えますね。初めてこの土地を見た時、どんなことを感じられましたか？」

北川●この中学校は作家の大江健三郎さんの母校です。大江健三郎さんの小説に、いつも登場する大瀬の山と樹木を目の前にして感動を覚えました。想像より川に沿った山あい

め校舎は後山の傾斜部分に建設することにしました。が、大江さんの小説にでてくる針葉樹の山、石垣、池などを保存しながら建設を小刻みな分棟形式にして自然の地形に沿わせました。

——「ここで勉強する中学生や建設に協力された地域の人々に、伝えたいことは？」

北川●古い校舎を取り壊すとき、屋根の瓦を保存して、その瓦を中庭に敷き並べました。この作業は、地元の人々と私たち設計者とのボランティアでおこなわれました。またそこから次の物語が生まれていくことを願っています。この学校の竣工の後、大江さんのノーベル賞受賞があり、なにか根群と、周囲の自然との関わりについて、景観という観点からひとこと。」

北川●谷あいが狭いため平らな土地がなく、学校のグラウンドが生徒や街の人々にとって、唯一のスポーツの場です。そのた

に沢山のあきがある。この学校の卒業生によってここが次々と埋まっていくことを楽しみにしている。と話しました。

——「最後に、瓦葺の渡り廊下がありますが、上越の雁木のイメージにつながるような印象を受けました。何となく、親近感を覚えますが、設計の段階ではどんなイメージでお考えになったのでしょうか？」

北川●私自身も上越市出身ですし、原広司も年に一度は上越市を訪れています。私たちの建物には雁木のようなイメージはしばしば使われています。

——上越市の景観についてひと言

北川●高田の町の雁木は、建築の手法としても、また都市計画の手法としても優れた技法だと思っています。世界に誇れる機能をもったランドマークだと思います。雁木によって高田のまちは独特のたたずまいをもっていました。私たちは世界の集落を研究してきましたが、厳しい自然を克服するために生まれた様々な建築的手法が素晴らしい集落を残してきた例をみます。高田の町から雁木が失われていくのは残念です。

起伏の多い四国の山並みと深い緑におおわれた森に、抱かれているようにその中学校は見える。そして、いくつかの棟に分かれた校舎をつなぐ渡り廊下が、雪国の雁木のようにも見えて、なぜか親近感を覚える。夫・原広司氏とともに設計にたずさわった北川若菜さんにうかがってみた。

北川若菜 (原広司+アトリエ・ファイ建築研究所長)

北川若菜さんは、高田花ロードでもアートディレクターを務められた北川アラムさんのお姉さんにあたられます。

特集 雁木のつくりも美しい人びと

編集委員(以下編)：松橋さんは上越とは縁が深く、高田公園内に完成した小林吉径邸の設計監理でこの数年、上越と関わっていらっしゃいますね。こちらの印象は？

松橋：そうです。子供時代にも時々高田の町屋で夏を過ごしたことがあります。城下町として古い歴史を持つ上越は、江戸時代から受け継いできた雁木を背景にして人情やたくましさや育み、お互いに譲り合う精神で雁木文化を築いてきたことに興味深く思っていました。

編：今日ここに持ちいただいた模型は設計競技で入賞されたもので、雁木通りの住宅をモデルにしていますね。
松橋：今日は私の考えた「雁木の家」を見ながら、実際に暮らしている人たちの意見を聞きたいと思っています。この住宅は通り庭や光庭を設け、自然採光や通風を得るとともに、冬には太陽光で暖められた空気が家の中を循環して、屋根面の雪を融かして中庭に自然落下させ、その雪を地下に設けた雪室に貯めて夏季の冷房に役立てた



【資源エネルギー庁長官賞受賞作品】

座談会

建築家

若きアーキテクト達の語らい

The young architects stories

特集

雁木のつくる美しい人びと

大雪の最中の2月、上越の若手建築士数名と長野から松橋さんを迎えて、上越の景観、特に雁木のまちなみに焦点を絞って、自由に話し合っていました。



出席者

松橋寿明〈宮本忠長建築設計事務所・長野市〉
第2回「大地に還る住宅」設計提案競技で「雁木の家」が資源エネルギー庁長官賞受賞

磯田一裕〈ハート1級建築士事務所〉

本多正弘〈金谷新太郎商店〉

関由有子〈せきゆうこ設計室〉

編集委員〈宮崎、守屋、横山、上野〉

い。そして市街地でも暮らし易く、年を取っても徒歩や自転車での足りる生活ができるようにと思います。もちろん、車社会は否定できないので、表から入る車庫もあります。

table talk 雁木は必要なの？

本多：その車社会になってきて、雁木の必要性が失われつつある昨今、本当に雁木は必要なのって聞かれると答えづらいものがありませんか。

磯田：一般市民にとっても、雁木のあるところへ行く必要性や機会が失われつつあるようにも思えます。

編：でも、改築されたお宅で伺ったのですが、雁木を残すかどうかもめた時に、町内の

子供達の通学路になっていて残して欲しいということ、残したお宅がありました。今冬の大雪もあって、子供やお年寄りのために残していきたいという方が圧倒的に多く、雁木本来の役割が見直されたようです。また、女性の立場からは、

夜道を歩いていて雁木に入るとほっとします。雁木の中だと、人とすれ違ってもしなげか安心、

という方が圧倒的に多く、雁木本来の役割が見直されたようです。また、女性の立場からは、夜道を歩いていて雁木に入るとほっとします。雁木の中だと、人とすれ違ってもしなげか安心、

すく横に人が住んでいるという状況があるのかもしれないですね。

磯田：雁木があることでコミュニティが守られてきたという事もあると思います。突然一件だけ飛び出して建てたりしたら、住んでられなくなりそう。でも、基本的に雁木は私有地だしほとんどが住宅。建替え需要の中でそれぞれの要求に応じて出てくる問題です。雁木のメリットとデメリットを話し合い、同じ方向にベクトルが向いていけば、規制などがなくても続いていくのでは？

松橋：家が全くなくなっても雁木だけが残っている所がありますね。ある意味では見えない道徳法というか、必ず雁木はつけるものという視念が根付いていて脈々と伝わってきているのでしょうか。

松橋：家が全くなくなっても雁木だけが残っている所がありますね。ある意味では見えない道徳法というか、必ず雁木はつけるものという視念が根付いていて脈々と伝わってきているのでしょうか。

table talk まるごと「暮らしの博物館」

松橋：雁木の役割として、雪や歩行者のためという他に、店先、あるいはオープンカフェテラス的な使い方とか、雁木が一体となった提案のようなものはないのですか。

一同：こちらではまずないですね。

松橋：長野では歩行者の歩くところまで自分達の商品を並べて出していますよ。こちらはその点奥ゆかしいですね。

編：商売のやり方が違うのでは？ここではお客の方が奥まで入って見せて欲しいといわれないといけないような雰囲気があります。でも、自分の土地を他人が歩く事を認め合っているのはすごいと思いますね。

松橋：歩いて見るとお店なのか住宅なのかよくわからないところが多く、よく見ると米屋だったり食堂だったり。そういう意味では歩いてみないとその良さが分からないかもしれない。

関：職人町では畳屋さんや建具屋さんが店先で仕事をされていて、子供達はそこを歩いて学校へ行く。

松橋：それ自体がまるごと博物館のようだ。歩いて見ると全部の工程がわかるのがいい。

関：人の暮らしの営みが見られるというのは、車でなく歩いて通れるからこそだと思います。雁木があり軒を並べているから何気なく見えてしまうので、これが一軒家だったら覗いているみたいで嫌な感じがしますね。

本多：子供達も建築士会でタウンウォッチングした時に、直江津の国体通りというところを写真に撮ってきた子が多かった。上越市の子供たちでも、普段歩いたことがない子にとって珍しかったんでしょうね。それを見た時、上越も捨てたもんじゃなないなと思いましたね。

table talk 心のバリアフリー

本多：雪国の雁木の風情みたいなもので、昔はよく大根が干してあって雁木の上部を有効に使ってましたね。

編：はしごとか雪下ろしの道具とかが渡して

あって、最初は上を向いて歩きながら何だろうと思ったけど、足元の高さが不揃いだから、あまり上ばかり見て歩けなかった。

関：他所から来た人には、アーケードのイメージがあって不思議に思うらしいのですが、私有地だからと説明すると納得します。特に町屋は床下通気が悪いだけに、新築する時には少しでも床を上げたくなる。

磯田：僕は雁木のいわゆるバリアフリーはあまり賛成じゃないんです。

関：ここでいう「バリア（障害）」って段差の事だけですよね。

磯田：雁木の中で、あの幅では車椅子はもともと動き難い。段差がないのは一番いいのかもしれないが、だからこそ助け合って今日があるのでは？住んでいる人たちの心のバリアがないところが雁木で、それをなくさないようにしていきたいですね。

編：現在は個々の家と雁木の高さをそろえている所が多いので、雁木全体で高さを揃えようとすると、大変なことになるそうですね。

磯田：新築でもどこかの家がお金をかけずに気の利いたことをすれば、他の家も見習うし、私の家もがんばろうかしらという風に雁木空間も楽しくなっていくんじゃないでしょうか。デザインする人が魅力ある提案をすべきだと思います。

編：今回インタビューした雁木通りのお宅で表側がコンクリートの家がありましたが、両隣と高さを揃えていたせいか、古い街並に溶け込んでいました。前庭をとって車を置いたり、屋根雪を溜めておくスペースにしながら光を採るようにしていましたね。設計された方の提案だったそうです。

table talk 朝市と雁木のいい関係

編：「歩いて暮らせるまちづくり」でも話題になっていますが、雁木通りの朝市は5日に一回は市が立つから、車がなくてもある程度歩いて暮らせる街になっていませんか？

本多：えっ？私なんか車で行って、近くに駐車して買い物してます。(笑)

関：自転車の前と後ろにくくり付けて運んでいる人を見かけますよ。実際、市の立つ所に雁木がなかったら、民家の方も嫌だろうし、丁度いい距離感の「間」だと思います。

本多：市の後継者が少ないんじゃないですか？

関：まだリヤカーで運んできたり、軽トラックで野菜とおばあさんを置いて、終わる頃に迎えにくるという感じもあります。

本多：それ、いいですね。

関：高山とか輪島の朝市を見ると、観光朝市になってしまっただけでなくなってしまう。観光化だけを優先してほしくないですね。絶対スーパーではない、市にしかないものを生かしてね。

table talk 行政の役割と市民意識

松橋：これは長野市の善光寺表参道の例です

が、個々の家で計画があったのを共同でまとめて、市から優良再開発地と認められて造ったものです。庇下の通り部分は私有地なんです。商店が並び、その奥に10階建の集合住宅があります。表通りから後退して私有地を公共に提供するやり方は、雁木と通りと類似する考え方であり、景観として参考になると思います(写真右下)。

本多：緑地のこの使い方がなあ、上手なんだよな。本町がこうなれば、歩く気がするね。

松橋：街の中でもこういうマンションなら何となく入ってみたいという気になるのでは。ましてや中心市街地の高層住宅に住む人は、大抵この周辺で用が足りて、職場も近くという人が多いでしょうから、車も使わないで商店街も潤う。今住んでいる人だけでなく、定住人口を増やすことで、まちの活性化にもつながると思います。

関：こういった再開発は、行政がどの程度表に出るのか難しいですね。守っていかないとばらばらになってしまう。反対に行政がガチガチに決めてしまうと自分達でやる気をするのをなくしてしまう。

磯田：行政としては、「雁木を維持していく」もっと思えば、「コミュニティを後世に伝えていくために雁木という形態を残していく」ための何らかの保証とか策を見つけてはほしいですね。補助金制度とかビジョンなどを一般の人に示さなくてははけないと思う。でも、基本的にはそこで生活している人達がどれだけ問題意識をもっているかってことですよ。

松橋：行政が介入してあしろうしろってことではなくて、住民たちの約束事みたいなものですよ。

table talk 景観は目に見えないおまわりさん

関：上越市でも景観条例の基本計画を策定中で、他の基本計画は5年くらいの見直しスパンですが、景観の場合は術が違いますね。今、私達がそれをすぐ実現するのは無理ですが、100年後にこうなるのではというビジョンを提示して、なおかつ啓発していくのが基本計画の趣旨じゃないかな。雁木に面するファザードのデザインコードなどを募集して、新築や改築される方に提案していくなど、行政と協

How Much The GANGI?

「雁木」を造るのにいくら位かかるのでしょうか。昔のように木が表に現れているもので、長さ1m当たり約15~17万円、準防火地域に指定がある場合でその10%~15%増し、さらに主家のない場合では25~28万円、規制がある地域ではさらにそれ以上になります。味も乗っ気もない現在のものよりも昔のような風情のあるものとして生かし続けていきたいものですね。(清水恵一)

table talk 若きアーキテクト達の語らい

調して建築士会とかでやったらどうでしょうか？まちづくりは教育も環境も様々な関わってきますが、景観を切り口にしたまちづくりもいいと思います。

松橋：私は「景観=ケイカン」とは「目に見えないお巡りさん」だと思っんですよ。(笑)警察官は本来犯罪を取り締り秩序を保つために



(建築画報237号より)

存在している。景観というのはみんなが配慮して秩序を守っていかなければいけない道徳的なルール、つまり心のルールでもある訳です。長く保たれてきたもので、この財産としては雁木だと思う。取り締まるわけではなくて、守っていかなくてはならないのでは

編：これからの上越の景観をつくっていく上で、住宅はとても重要。それをつくっていく建築家の役割も大変重

要なものだと思います。

本多：たしかにまちづくりとか景観という意味では問題ないと思う。昔ながらの高田の街並は雁木がイメージとしてあるからいいが、これから先、皆が私有地を提供して雁木を残そうとするだろうか。ある一定の地区を決めて、そこには商店街もあり店先で仕事している人もいるような所をまず残していけばと思う。

編：そこが上手くいって認められれば、他の地域にも広がっていくかもしれない。確かに、生活からにじみ出たといえば、大町通りにあった筆筒屋さんなどは、技術も受け継がれなければその光景は壊れてしまう訳ですね。

磯田：現実にはやれることから始めるのが大事、建築家にもある意味で責任があるでしょう。

編：建築家だけでなくそれぞれの分野のプロや一般の人が互いの思いを出し合える場を持つことが大切。

関：まず、そういう場を行政には提供してほしいですね。

編：まさに今回の情報誌のテーマですね。「ちょっと考えてみたら」という。今まで、上越は他所から見られるという意識があまりなかったの、いい意味での意識づけになりますね。

——皆さん、どうもありがとうございました。

すてきな風景、ほっとする風景、残しておきたい風景（建物）等々とおきの景観を応募してもらいました。本年度も107点という多数の応募があり、景観大賞1点、景観賞7点、特別賞1団体が選ばれました。

景観デザイン賞審査委員
 荒川 毅 会社員（「岩魚仙人」というビデオを製作、世界的な賞を受けた）
 伊藤 春男 作家 日本庭園協会新潟支部副支部長
 遠藤 流一 前新潟日報上越支社長
 佐々木かおる 上越教育大学大学院生
 関 由有子 せきゆうこ設計室代表
 筑波 進 市美術・デザイン専門員

● 審査員による各賞の講評 ●

景観大賞
 [上信越自動車道ジャンクション]
 comment

受賞者/日本道路公団北陸支社
 推薦者/鈴木文吾



開通したばかりの高速道路には、上越の産業や文化、人の交流の動脈となることへの期待感が込められています。またこの地に暮らす人々の、自然と人工物との共存を図り、未来に向かい歩む姿を映し出します。間伐材を使った防音壁も共存への努力の賜物ではないでしょうか。インフラ整備と同時に、自然環境との折り合いを真剣に考えなければならぬと痛感させられます。

景観賞
 [赤レンガの防火壁]
 comment

受賞者/(有)高遠回瀆店・(有)高遠倉庫
 推薦者/滝田正勝

ライオン像と煉瓦の壁が、近代洋風建築と港町直江津の歴史を語ります。景観デザインとは、現実の空間的な美しさばかりでなく、それを支える人々の暮らしや時間の流れをデザインすることなのかもしれません。

景観賞
 [二七市場のにぎわい]
 comment

受賞者/上越市朝市協同組合
 推薦者/本間一夫



朝市とはこんなにも明るく輝き、人々の表情、動きが懐かしいものだったのでしょか。この魅力は、メインストリートではない昔ながらの雁木通りでの仮設市、それも日時を限っての市だからかもしれません。「市のたつ日」は「普段の日」とはちょっと違います。

景観賞
 [来迎寺さんの桜の門]
 comment

受賞者/来迎寺
 推薦者/川上弘



まるで一幅の掛軸をみるように、黒塗りの重厚な軸組と白い漆喰壁のコントラストに、桜のあでやかさが見事です。花のない季節でも「この門の奥にはどんな景色が広がっているのだろう」と思わず引き込まれるように中へと歩を進めたくくなります。

景観賞
 [赤い屋根、とんがり帽子の写真館]
 comment

受賞者/小熊写真館
 推薦者/田崎秀尚

赤い屋根、青い空に向かって鳴いている風見鶏、とんがり帽子の時計台。大人にも子どもにも馴染みのある風景です。20世紀を通じ高田の暮らしを見つめ、シャッターを押し続けた翁のスピリットがこの写真館に宿っているような気がします。

景観賞
 [直江津駅自由通路]
 comment

推薦者/高橋勝彦



自由通路の丸窓から見える山々やまちなみを眺める人、友と語らう学生たち。駅の南北がつながり、自転車を引っ張るおばさんや病院へ通うおじいさんも、便利になって心なしかうれしそうに見えました。便利になることも必要なことで、今までの雰囲気やどうしたら壊さずにうまくマッチするかをみんなで考えていきたいものです。

景観賞
 [カトリック教会の冬のイルミネーション]
 comment

受賞者/高田カトリック教会
 推薦者/滝田正勝



カトリック教会の門の大きなヒマラヤ杉に飾られる灯りは、通る人々の心を温かくしてくれる風物詩となっています。電飾看板の皓々とした明るさもなく、どんなに大きくて明るい看板よりも、その意味するところは明確に伝わり、それ以上に大きな役割を果たしているようです。

景観賞
 [渡瀬橋から南葉山を望む]
 comment

推薦者/田中保行



緩やかにカーブする矢代川、コンクリートに覆われていない河原の畑、土手に植えられたコスモス、その向こうの信越線の鉄橋…と、自然の中に人間の営みが融合しています。身近なところに注目しながら見守れば、「景観」の大切さも理屈ではなく、私たちの身の回りの問題として意識されてくるはず。ゴミを捨てない。場違いな看板を立てないなど。この懐かしい光景との調和を考えていきたいものです。

特別賞
 [上越情報ビジネス専門学校]
 comment

第1回目（平成7年度）から、今回の第6回目まで毎回上越の様々な景観を応募。感性豊かな若者達の目で捉えた上越の景観は、熟年者のもとはまた違った新しい発見があると思います。これからの長い人生経験により景観に対する想いも変わってくるとは思いますが、その熱意を忘れずに持ち続けることを期待します。



室内の家具は旧銀行時代の注文家具。電話ボックスやアールデコ風の机と椅子が歴史を物語ります。(高遠回瀆店)

景観賞 pick up

なじみの景観に綴じ込まれた深い歴史を知りたい…。選ばれた景観賞の中から2カ所、あらためて訪問してみました。

ライオン像と赤煉瓦の防火壁

まず、軋む扉を開けて中に入ると、高い天井と古い電話ブースがあり、タイムスリップしたかのような印象。明治時代に建てられた旧直江津銀行の建物を、大正初期に現在地に解体移築して以来、ずっと「高遠回瀆店」として使われてる。創業者である高橋達太さんの姓名から一字ずつとって名付けられた。

現支配人の齋藤さん曰く、「基礎が頑丈なので新潟地震でもびくともしなかった。合掌造りの屋根裏は天井が高いし、真夏でも窓を開ければ浜風が気持ちいい。」とのこと。昔の直江津港界隈の賑わいと産業の歴史を物語る建物で、維持管理に努め、まだまだ現役で使っていきたいというお話から建物への深い愛着を感じた。



東京三越のライオン像をモデルに、刈羽村の石工が彫ったもの。米山の峠を荷車で越えて直江津まで運ばれたそう。

小熊写真館

外観で印象的な風見鶏がとまった時計塔は、建築当初の計画になかった。長年ファインダーごしに歴史を見つめてきた二代目小熊夫妻の欧米建築への思い入れと、通行人への思いやりがこの塔を実現させた。

昭和57年に建築される以前の旧小熊写真館は現在、愛知県犬山市にある博物館明治村へ移築され「高田小熊写真館」として保存されている。創業者の小熊和助氏が撮影したレルヒ少佐の写真が、古い写真を収集していた明治村の担当者の目にとまったことがきっかけだ。区画整理により移転される運命にあった「明治の写真館」は、はたして時代の香りとともに旅に出た。

バトンを受けた現在の写真館、今日も通行人の足を止め、風見鶏は上越のまちを見続けている。



建築計画にはなかった時計塔もいまやすっかり街のおなじみに。(小熊写真館)



現写真館は昭和56年、旧写真館の跡地に建てたもの。(二代目小熊御夫妻)

私だけが知っている、とっておきの場所!

ぶち Petit Landscape 景観みつけた!

あなたの身の回りのほんのちよつとしたとっておきの場所。思い出に残る場所を編集スタッフが市民にそと聞きまわりました。何気ない景観でもあなただけの心に思い出とともに残るものがきつとあると思います。そんな身近な景観を発掘する目をもちたいものですね。そうしたこと、ちよつと変なところはみんなよく知っているよ、という気持ちが芽生えるのではないでしょう。

1 本の木

国道から見える、有間川にあるけずられた山に一本だけ立っている木。他の木は切られているけど、何故か一本だけ残されていて、しかも目立つから。信号で止まるとよく見てしまう。(高校生)

自動販売機をつぶやき

「この町内から季節を告げる音がきえた。」1年前、私が最初に目にした張り紙の言葉だった。誰かの言葉を借りるかのように、紙はその時々ごとに張り替えられているらしい。踏み切りの電車待ちをしている車の中からみつけた小さなつぶやき…。(I.Y)



田んぼの番人



1年間毎日ここを通って仕事場へ行った。風景は毎日毎日色を変え、私を励ましてくれた。(M.S)

心のオアシス

勤務先(新南町)の建物屋上から見渡す妙高連峰から南葉山への稜線。冬、毎日どんよりとした天気が続く中、時折、一瞬ではあるが太陽が顔をのぞかせる。その時、窓から見える雪の妙高連峰が非常にすっきりと見え、仕事に追われてピリピリしている心を一瞬、リラックスさせてくれる。(S.F)



夜のパークミュージシャン

晩秋の高田公園、図書館前芝生広場で、時々お見かけします。公園灯の下ですが、もう少しヒューマンな灯りだといいかも。夜は街中だと迷惑になるからと、こんなワビシイ場所で練習しているとのこと。ストリートミュージシャンになれるといいですね。でも、春になったらまた来てください。(Y.S)



前へならえ

上越大通り沿いにある土木会社駐車場のダンブは、ものの見事に車列がびったり整然と並べられ気持ちがいい。(C.F)



思い出の場所

谷浜の山奥…というか駐車場の奥にある元ダムの場所。すごく高くて日差しが当たっているとききれいだっただ…ような気がする。今はもしかしたら壊されていたり、水も流れてないかもしれない…(高校生)

木造の階段

大町小学校の木造の階段。古くてでこぼこしてはいるけど、こころがよいから好き。(高校生)



愛嬌者の狛犬

前島密記念館のそばにある下池部社(前島密の生家)の阿吽の一對で、特に「吽」君がカワイイ。丸々とした体形でちっともコワくない。大正時代に奉納されたのですが、なかなかユーモアのある石工だと思いませんか。菰を着せてもらって吹雪の中でがんばっています。雪国の風情。(Y.S)



だるま神社

不思議、どんな人が中にいるのかとも知りた。でも赤い色と古くなった木の感じがいい。(高校生)



屋上の夜景

雁木通りプラザの屋上の夜景。(なかなかgoodです。)なかなか夜景を楽しむところがないので、行くと“上越もイーナ”なんて思う。(高校生)

きれいな地球

市民プラザの看板が夜ライトアップされると、ブルーとグリーンが透き通るようで、まさに『きれいな地球』という印象。(N.F)



雁木通りプラザの若者

午後になると一人、またひとりと集まってくる。楽器を手にしている者、ベンチになんとなく掛けている者、グループで話している者達…。なにか引力を感じます。(Y.T)



ガード下の公園

高速道路高架直下(木田)の公園。真夏の炎天下も、激しく降り続く雪も、天を覆う分厚いコンクリートが見事に遮ってくれる、まさに全天候型の広いプレイランド。ひっそりとして目立たない存在だが遊具も設置しており、仕事中の昼休み、キャッチボールで通いつめたことがあった。(H.O)

ビクター君

北城町の町内ゴミ集積所のお隣、首をかしげたあのポーズで座っています。ちょっとシュールな風景。何に耳を傾けているのかしら。ゴミを出しに行くたびに、ちょっと話し掛けてみたくなりそうです。きっと、ゴミ出しのマナーも良くなるのでしょうね。(Y.S)



秋のコスモス

秋になるとリージョンプラザのまわりにコスモスが咲いてキ・レ・イ。(高校生)

タコの滑り台

稲田のタコ公園のタコの滑り台。タコの滑り台にいろんな青春メッセージが書いてあるから。あと、小さい頃いっぱいX2滑ったから。(高校生)



雁木の間から見える空

仲町通りの雁木と雁木の間から見える空(晴天のお昼頃)。雲のかかった空が、少ししか見えないけど、電車とか入り交じって太陽が微妙に見える感じがよい。必ず見える訳ではなく、見たその時にしか見えない空だから良い。大きな空が小さく思える感じが凄。(高校生)

市長に突撃レポート!



市長にとって景観とは?

フォーラムに出席するため市民プラザへやって来た市長を、景観情報誌編集員が取り囲み、質問をしてまいりました!

人がいてこそ景観である。

「市長にとって景観とは?」の質問に、即座にこう返され、人々に対する深い愛情とまちづくりに対する強い思いを感じました。お気に入りの場所は、春霞みの頃の高田公園の桜と冬の山々の情景。また機能性、便利性の観点から発生した上越の雁木を今後は、人々の「連帯感」や「ふれあい感」を重視した新しいスタイルとしてアピールしていきたい。オープンしたばかりの市民プラザや高田、直江津駅前もそんな見方で歩いてほしい、と話されました。

この土地の人については、素直で辛抱強く、人がいいネ…私のようにね(笑)…とほろやかに語る已年柄のネクタイがおしゃれな市長でした。





My favorite Joetsu

外国の目から見た上越の風土

The natural features of Joetsu from the eyes of a foreigner

景観という、ヨーロッパの荘厳なきちんと統一されたまちなみや、窓辺に花が飾られた家が続きまちなみなどを思い浮かべます。欧米では家の外側はみんなのもので、色や外観などを守らなければならないという意識が100年以上前からあるそうです。上越に滞在した外国人の目に、どんなふうに見えるのか聞いてみました。



Riitta Ri Salastie
リタ・李・サラスティエさん

私は3年前に初めて上越を訪れ、そして昨年12月、友人の関由有子さんの新しい建築設計事務所オープニングのために再訪しました。その2回とも、この街に残る伝統的なまちなみと、それが良い状態で保存されているのを見て、私はとてもうれしくなったのです。とりわけ、上越特有の雁木通りと町屋のデザインには、驚きを感じました。彼女のオフィスも古いまちなみにあります。

上越では、このようなユニークな暮らしの文化財を保ち続けられる。それは、たとえば、京都ではあまりにも絶望的に難しいのです。上越市の都市計画部門がこの街の文化財の価値を十分に認めて、後に続く世代にそれを残し伝えていくように努められることを、私は心から願います。

もうひとつ、上越で心から楽しかったことは、川べりの遊歩道やお城の濠、さらに、周辺にひろがる美しい緑の景観です。この市街がまだ、高層ビルの侵入を受けずにいられるのは素晴らしいことでしょう。それは、街と周囲の山並みとの間にもこうしたこのハーモニーを壊しかねません。

3番目の建築的な体験は、少しスケールの異なるものですが、その価値は変わりません。私は駅に近い、伝統的木造の和風旅館「長義館」に泊まりました。素晴らしい庭に囲まれた旅館で、庭の樹木が重い雪に耐えるように竹で囲われているのを見て、本当にびっくりしました。フィンランドのような北国の出身にもかかわらず、この樹木をいたわる繊細な造園テクニックと、それ自身芸術とさえいえるような美しさに驚いたのです。旅館の女将さんは、これはお金



スウェーデンに向き合うボスニア地方の街ラウマには、近世以前の木造のまちなみが残されている。自然石舗装の道も当時のもので、まち全体が世界遺産に登録されている。

以下原文…

Riitta Ri Salastie
SOME IMPRESSIONS OF JOETSU-SHI

I visited Joetsu-shi for the first time three years ago and then again in December (2000) when I participated in the opening of my friend's, Yuko Seki's new architectural office. Both times I was very pleased to find well preserved urban areas and traditional townscape that still exist in this town. Especially I was amazed by the arcaded streets and the special type of machiya design that is typical for Joetsu-shi. Also Yuko's new office is situated in one of those old machiyas.

It seems, that in Joetsu-shi you were able to keep this unique everyday heritage still alive; a task that has been so hopelessly difficult in Kyoto. I really wish - (if you have not yet done it) - that the city planning authorities become fully aware of the worth of this urban heritage and take every effort to ensure its survival and protection for the generations to come.

Another thing that I especially enjoyed in Joetsu-shi were the beautifully landscaped green areas such as the riverbank walk, the area around the castle



リタ・李・サラスティエ
(フィンランド建築家協会)

1984年に初来日以来、6年近く日本に滞在。京都大学にて日本建築史を研究し、京都の街並保存に関する博士論文を出版。現在はヘルシンキ在住。都市計画を担当する建築家としてヘルシンキ市都市計画局に勤務。

pond and also, the beauty of the surrounding landscape itself. It is wonderful that the city is still kept almost intact of high rise buildings that would destroy the original harmony that exists between the city and the surrounding mountain landscape.

My third architectural experience is a little bit different in scale but not less valuable. I stayed in a traditional type Japanese style ryokan, Chouyoukan, near the railway station. This is a wooden structure built in a traditional style with a lovely garden around. To my great surprise, all the large trees in the garden were supported by bamboo poles to make them strong enough against heavy snow. Although I myself come from a very Northern country such as Finland, I was surprised to find this delicate gardening technique that showed so much concern for trees, and was aesthetically so pleased that it was like an art work itself! The hostess of the ryokan, an elderly lady, told that it is very costly and burdensome to keep this tradition alive.

In the evening I enjoyed a traditional Japanese bath, that was connected to the garden view through a large landscape window. Is it not this kind of elegance that we Europeans so much admire in Japan and in the traditional Japanese architecture?



Silke Steckelies
シルケ・シュテケリースさん

初めて上越に来た時の印象はなにもない町だと思いました。田んぼと高速道路ばかりで家や店や木も少なくこれから毎日自転車で通学するにはつまらない道だと思いました。

しかしそんな印象はだんだん変わってきました。今では逆に上越はたくさん魅力がある町だと分かりました。その中で私が特に気に入ったのは美しい海や山が身近にある上越の自然です。それから町のなかでは日本を感じる仲町の建物と雁木通りです。夏の太陽の光の下でとても美しいと思いました。その風景こそが日本だと思う外国人は多いと思います。しかしそのような素晴らしい雰囲気があるところを音楽やアナウンスなど煩わしい音が邪魔をしていて、日本は騒々しいと私は思うようになりました。

日本の田舎はドイツと比べると単純というかあまり装飾がない。ドイツ人は何も無いところには出来るだけたくさん花や木、それから休むためのベンチを置こうとします。彫刻や噴水も大好きです。例えばドイツは庭がなくても窓の外側に花を飾ります。ベランダがある場合、そこにも大きく花を飾ります。日本の場合、花は玄関に置いてあるのはよく見かけますが家の前にはたまにしか見られません。

飾りがないと洋風の家は私としては冷たい感じがします。しかし和風の建物ならばそのままきれいだと思います。

上越は季節の自然がとても美しいので、町の中や家の前にもたくさん花があればいいと思います。



シルケ・シュテケリースさん / 上越教育大学留学生。日本文化に興味をもち、近松門左衛門を研究。



Annaleigh Baker
アナリー・ベイカさん
高田高校ALT カナダ人

上越のまちなみはとても魅力的だと思います。特に雁木は生活の知恵や古い趣がうかがえて、興味深いです。道路はやはりカナダと比べると狭く感じます(カナダは約2倍)。その分、商店街は郊外へ行かなくても買い物が出来るので、車の無い人や老人にはすごく便利だと思います。

夜の景色は、街灯が少ないせいか暗く感じます。高田公園は、とてもきれいな場所だと思います。

上越の人はみんなとても親切。病院でも銀行でも道に迷っていても、ほんとうに親切に教えてくれますね。

町並みを保つためにもっと街角に花を植えてもよいのではないのでしょうか？ また、公園ももっと沢山あってもよいと思います。(カナダには、常に子供が遊ぶ大小様々な公園、キャンプ等が出来る人造の湖が沢山ある)

カナダではクリスマスの時期になると各店や家々に飾り付けを競うコンテストが開かれます。また、グリーンデーを設け、子供を中心に街をきれいにするボランティア活動をしています。ゴミの分別は全く無く、役所でやってくれます。そして、公園を守るパトロール隊があります(主にアメリカ)。

また、庭の概念が日本と大きく違い、自分の家の庭は他人に見せるため、回りの景観や美観に気を配っています。たいてい前の庭には、花を植えて、後ろの庭では野菜を育てています。

私は、資源を無駄にしない為日本で旅行をする時は、必ず自分の箸をもっていき、割り箸は使わないようにしています。



Graig/Teresa/Mary
クレイグさん/テラさん
マーティーちゃん

上越に来てもう4年たちますが、この春アメリカに帰ることになり本当に残念に思います。

上越は、私達の育ったところと比べ、とても街自体がきれいです。

一方では、古い伝統的な建物が残されており、一方ではソーラーシステムなどを使った公共の建物があり、とてもバランスのとれた街であると思います。

アメリカにおいての市民の交流の場は、教会やレストラン、また自宅でのパーティーになりますが、上越には、公の機関でそれに代わる場所が沢山あり、とてもいいと思います。海は、少し汚い所もありますが、山の景観は絶賛すべき場所が多くありました。が、しかし高速道路の工事などでハイキングをする所が減ったのが残念です。

上越の人はとてもフレンドリーですね。そして、茶道やお花、三味線など伝統芸能に熱心な方々がとても多いと感じます。アメリカでは、人々は一生の家を持つという考えはなく、引っ越しをする回数がとても多いため、建物自体にそれほど固執はしません。

景観条例のようなもののあり方や考え方は日本とはほぼ同じだと思います。

また、公の場所はある程度決まりを作る必要があると思います。もちろん、アメリカと同じといっても人口や街の規模の違いもありますのでそれぞれに応じた決まりを作るべきではないでしょうか。

アメリカには、小さな商店に代わって郊外に巨大なショッピングモールがあり、それが逆に街の空洞化をまねいています。

上越の雁木のまちなみや、小さな商店街は私も大好きだったので、是非保存に力を入れてほしいですね。



活動レポート

Activity Report

Report ① 石橋1・2丁目

公園のあり方に一石を投じる

いしばし ZIZO [地蔵]ノ森



Zizo no mori
参加して
思うこと...

●平野正さん(石橋1・2丁目町内会長)
このお地蔵さんは、眼病にきくという事で参拝者もとても多いんです。そんなお地蔵さんと隣の空地进行を結んで、地域の人々が語り合える場をつくりたかった。各自の庭にある木をそこに移植して、自分たちで世話をしたり、ユニークな試みだと思っています。ゆくゆくはここを地蔵盆の広場にしていきたいですね。

●吉藤唯さん(直江津南小学校6年生)
コンクリートの上に、大きな絵を描きました。筆じゃなくて、ローラーで塗ったのが面白かった。絵のデザインは上手にできたと思う。皆で植えたどんぐりの木が大きくなって、小鳥がたくさん集まってきたらいいな。

●阿部むつみさん(子供会会長)
石橋の子供たちは結構団結力があるようです。祇園祭とかで、日頃、協力し合っているせいかもしれませんが、実行委員さんの熱心な呼びかけに協力したわけです。コンクリートに絵を描く前にはおとなしくて



2000年11月に行われたペインティングイベント。

いましたが、塗り始めたら段々ノッていった。次は遊具やベンチづくりにも参加して欲しいですね。

●本間實さん(zizo[地蔵]ノ森実行委員)
有志の集まりがボランティアで何から何までやっていくのは大変ですが、手づくりの楽しみがあり、自分たちの公園だという

資材置き場がわくわくするような公園に変身。
市民主導の手づくり景観のススめ。

「従来の公園におもしろみのなさを感じていました。小さい頃、鎮守の森など身近に遊ぶところがありましたよね。もっとわくわくするような公園づくりをしたいと思っただんです」

上越市石橋で企業の資材置き場に利用されていた土地を、自然に囲まれた公園にしようと、同町内在住の小林さんが市民による公園づくりの実行委員会を立ち上げたきっかけである。

「一町内単位でものごとを考えるのではなく、もっと広域に考えを進めたい。空き地や手入れがされていない土地がぼつぼつとあるわけです。そういうところを行政の力を借りず、市民の力で活用していければ、と思いました」

計画書を手には、淡々としながらも熱い口

気持ちが強くなってきます。春になったら、遊具やベンチ、植栽や柵も、何をするか、お金をどうするか、そこから話し合いが始まります。そういう話も屋外でやっているんですよ。

●阿部裕さん(直江津南小学校6年生)
コンクリートに絵を描くとき、出来あがっていくのを見てどんどんおもしろくなってきた。これからは、他の町内の人も参加して欲しいです。きれいになったら野球をしたいな。



●阿部靖子さん(地面の絵を指導した上越教育大助教授)

8号線沿いの岸壁で、大壁画をデザインしたことがあります。地面の絵は初めて。まず中心を決めて、そこから外へ広がっていき、バラバラにならないと思っていました。土中のアリの巣とか、太陽の光線とか、何か、「外へ広がっていく」イメージ。ただ眺めるだけの絵でなく、自分たちが描いた線をいかし、遊んでくれると嬉しいですね。

地域のみんで、仲間同志で、自分たちの身のまわりを素敵で憩える場にしていこう。これが景観づくりの始まりです。生活に潤いを与えてくれる公園を、自分たちで考えつくり始めた石橋地域の人々。まちをもっと知り、魅力あるまちづくりにしようと雁木を調査した大手町小学校の子供たち。これらの活動についてレポートしました。



「zizo(地蔵)の森」公園イメージ図。今後、植栽や遊具の設置などみんなで考えながらつくる。

調で言葉をつないでゆく。

町内会行事ではない、町内会の予算は使わない、町内会長が管理責任者ではない、利用責任は利用者個人である。というシステムだ。また財源は、協力者からの援助を積み立てた資金を利用し、その範囲でできる事から進めていく。そういう提案に対し、当初町内からは不安意見もでたとい



夢の公園づくりはゼロからのスタートだった。

う。その中「地域環境は自分たちの力でやらなければならない。行政がしてくれるのを待つ時代ではない」という助け船の意見に後押しされ、夢の公園建設はゆっくりと、しかし確実に実現へ向け動き出した。

「実際の公園づくりにあたりネックとなったのは、厚さ30cmのコンクリート地面でした。最初は崩すことも考えましたが、せつかつたのでこれも利用することにしました」

15メートル×12メートルもある巨大なキャンパスとして、地元の小学生たちに絵を描いてもらったイベントは、まさに逆転の発想から生まれた。『いしばし zizo(地蔵)ノ森』という名称は子供たちへの募集により決められた。長く地域を見つめてき

た公園協の地蔵にちなんだものだ。「風のとりで(磐)公園...これが仮称でした。磐の上から地域のコミュニティーを守るという西部劇的イメージもあっていいでしょ。景観もよくなり、大人も楽しめる公園ですよ」と小林さんは笑った。

手づくりの公園は、自分たちの公園だと子供たちも自覚するだろう。コンクリートに絵を描いた少年少女たちが大人になる頃、都市公園のあり方に変化が訪れているかもしれない。(太田)

Report ② 大手町小学校

ボクらのまちが好き
雁木新聞・雁木の歌
机上では味わえない、
歩いてわかった雁木のこと。



なんと「雁木の歌」までつくってしまった。雁木と共に生きる人々のぬくもりを綴っている。



アンケート結果や雁木の種類など掲載した「雁木タイムス」。

自分達の住んでいる街を改めて見ると、今まで気づかなかった姿があることを感じ、自分達の街に対する愛着を大切にしたいと思う。こうした思いから大手町小学校の6年生は歴史・福祉・環境をはじめ雁木通りについてそれぞれグループに分かれて調査した。雁木を調査した子供たちは高田の街を繰り返し歩き、雁木通りの石畳や古いマンホールのふた、史跡などから高田の街の歴史深さを感じたり、ボランティアに

よる鉢植えなど街で生活する人のための配慮を感じたり、これまで意識しなかったものが見えてきた。

雁木グループの大塚君は「調査の結果、雁木は歴史的資源として残してほしい」と感じたようだ。また「駅前の雁木は、天井が高いので雪が吹き込みやすく、雁木の目的とは少し違うけど、これからの雁木としてカッコいいから好き」とも話していた。(上野)

感じてください。まちの色。

I wonder what color the people of Joetsu like?

旅行案内書のパンフレットを見ると、その土地のイメージが浮かんできませんか？北の北海道は、澄んだ青空に白い流水…南の沖縄は透明度の高いブルーの海に鮮やかなハイビスカス…

でも、その景色の色あいや鮮やかさは北海道と沖縄では少し違って見えませんか。理由は色々考えられますが、その一つに緯度の違いによる色の見え方が関係しているという説があります。

北と南では気温が違うように、太陽の光の色も緯度の高い地域ではやや青みに片寄り、低い地域ではやや黄みに片寄っています。そのため、北では青などの寒色が映え、南では黄や赤などの暖色がきれいに映えて見えるというものです。

また、色の見え方は降水量にも関係し、東京のような乾燥した地域と上越のような年間降水量の多い地域では、明るさや鮮やかさなどが違って見えます。

さて、地域の色はその土地の焼きものや、染色などの色からも探ることができるのではないのでしょうか。

例えば、金沢の加賀友禅と京都の京友禅。技法の違いもありますが、同じ友禅でも、朱色一つとっても、色調の違いが見られます。焼きものでは、益子焼や有田焼など、その土地の土から作られる色あいや特徴的な色使いがみられるなど、とても興味深いものがあります。

また、私たちをとりまく自然というものも、その地域の色を表しているように思います。

雪国に暮らす私たちは、水墨画のような山々が、木々の若芽や、山桜の淡い色に少しずつ塗り替えられていく様子など、そこから周囲の色が刻々と変化していくことを感じることができます。

みなさんも少し意識をして、日常や旅先でいろいろな風景や建物などを見て、地域の色を探してみてください。きっと新しい発見があるはずです。

美しい“地域の色”を発見し、大切にしながら未来の子どもたちに引き継いでいく…そんな取り組みも必要ではないかと思えます。(宮崎朋子)

◆ 旅行案内書に多くみられる色 ◆



※市内書店・旅行会社にて調査

ボクたち地名探偵団 —— 児童隊員による地名に隠されたストーリー調査。

We are the Geographical Name Investigation Group

調査：春日・大町・大手町各小学校児童のみなさん

市内の小学校の皆さんに、それぞれの地域の地名について調べていただきました。景観づくりのヒントになるかもしれませんね。

●春日小学校の3年生から

岩木 (イワキ)

昔は“ゆはき”ともいわれていた。正善寺川流域に「いわしろとりで」があり、後に「岩木」と呼ばれるようになった。(藤村勇太さん)

寺分 (テラブン)

林泉寺のお寺の寺領だったので、寺分とよばれるようになった。(市川浩成さん)

大豆 (ダイズ)

春日山の東山ろくで、昔は城下の中心だった。城がなくなった後は、荒れて水田にできず、大豆畑になっていた。(森橋彩美さん)

中門前 (ナカモンゼン)

林泉寺の門前にあり、ぎょうせいの中心地だった。(いそ田しょうたろうさん) 春日山城で、お城の中門があった所が地名になった。(竹内政紘さん) 林泉寺の門前に開かれた村だったから。(五十嵐正さん、上石翔子さん) 昔のおさむらいが住んでいた所。(宮崎拓人さん)

中屋敷 (ナカヤシキ)

上杉謙信の時代に城下町としてぶしょう(家来)のやしきがあった所。(いいよしまいこさん、中村れんさん)

牛池新田 (ウシイケシンデン)

春日山城裏手の番屋(ばんや)とりでがおかれた所に、新田村として開かれたが、山坂が多くて、牛がゆいつの運ばんしゅだんであった。その牛の水場であった池にちなんでこう呼ばれるようになった。(藤村勇太さん)

春日 (カスガ)

か(神)、ス(住む)、ガ(所)という意味で、大和(ヤマト、今の奈良県)の春日という地名が地方にも広がっていた。(たけ田直子さん)

春日野 (カスガノ)

春日山のふもとに広がる平野の部分に新しく住宅地がつくられたときに、住民がみんな決めて。(中じまあやさん) 住民にアンケートを取って一番多かったのが春日野、野原のようになるように。(佐藤知葉さん)

宮野尾 (ミヤノオ)

「宮」は神社、「野」は「え、の、の」、「尾」は山麓や尾根、裾を意味するので、「宮野尾」で、神社の裾野ということ。(米山太平さん)

●大町小学校の3年生から

桶屋町 (ウケヤマチ/現 仲町四)

桶屋町はおけ作りの職人がたくさん住んでいたことから、この名がつけました。(平井友輝さん、磯貝明子さん、小酒井碧さん、貝澤翔太さん、高橋正伸さん)

鍋屋町 (ナベヤマチ/現 東本町五)

鍋屋町は鍋作りの職人がたくさんいたことか

ら、鍋屋町と名付けられました。おけは風呂・洗濯などいろいろ使われました。樽には酒を入れました。(佐藤竜馬さん、香西円さん、北川かすみさん、新井美咲さん、高橋正伸さん、貝澤翔太さん、小酒井碧さん、磯貝明子さん)

呉服町 (ゴフクマチ/現 本町二、三)

呉服町は今の本町二丁目、三丁目です。周りにはたくさん職人が集まって、大きな城下町を作っていました。着物や反物を売っていました。(佐藤竜馬さん、北川かすみさん、新井美咲さん、白鳥佑太郎さん、佐藤夏希さん、香西円さん、村山友基さん、竹内章子さん、福原卓実さん、相葉ヨナさん、武田敦さん)

寄大工町 (ヨリダイクマチ/現 仲町六)

昔は木材をたくさん使い家を工夫して建てていました。この町は大工さんがたくさんいる町です。今はコンクリートがたくさん使われているけど、木の家の方がいいですね。(新井美咲さん、北川かすみさん、渡辺奏子さん、前田麻衣さん、石田弥月さん、小出大輝さん、吉澤優さん)

大鋸町 (オオガサチ/現 仲町六)

この町の職人さんはのこぎりを作っていたようです。昔は、のこぎりを作る店はいっぱいありましたが、今はほとんどありません。(大嶋和雄さん、上杉美樹さん、脇川沙紀さん、野口拓也さん)

鍛冶町 (カジマチ/現 東本町五)

鎌やくわなどを作る職人さんがたくさんいたため、この名前がつけられました。畑を耕すのに必要な道具を売っていたので、大切な町でした。(香西円さん、石田弥月さん、小出大輝さん、前田麻衣さん、吉澤優さん)

上紺屋町 (カミコンヤマチ/現 仲町一)

この町は着物を染めていた店がたくさんありました。今も店が多少あるみたいです。(上杉美樹さん、大嶋和雄さん、脇川沙紀さん、野口拓也さん)

下紺屋町 (シモコンヤマチ/現 本町七)

下紺屋町には、着物の色を染める名人がいました。昔は今と違って、普段も着物を着ていたので大切な仕事でした。職人が自分の手で布を染めていたようです。(綿貫慶彦さん、小林卓也さん、宮澤美晴さん、田中夏希さん、荻野知太さん)

横町 (ヨコマチ/現 本町二)

旅館(今の旅館のような泊まる所)がたくさんあったので、この名前がつけました。今の本町二丁目にもぎやかですが、昔はもっとたくさんの人で活気があったことでしょう。(新井美咲さん、宮澤美晴さん、小林卓也さん、綿貫慶彦さん、荻野知太さん、田中夏希さん)

出雲町 (イズモマチ/現 南本町一)

今の南本町一丁目です。この町を作った人の名前から、この町の名前がつけました。出雲さんは、この町のためにいろいろなことをした人なのかなと思いました。(村山友基さん、佐藤夏希さん、相葉ヨナさん、竹内章子さん、武田敦さん)

伊勢町 (イセマチ/現 南本町一)

伊勢町はこの町を作った人の名前です。出雲町もそうですが、今の南本町のあたりには、町を作れるほ

どの実力をもった人がいたことが分かり驚きました。(本澤潤一さん、内藤真希さん、牛木千洋さん、青木一真さん)

本誓寺町 (ホンセイジマチ/現 東本町四)

昔のお寺の名前をとって付けられたようです。今の寺町のように、高田には昔から有名なお寺があり、数も多かったようです。(本澤潤一さん、内藤真希さん、牛木千洋さん、青木一真さん)

六軒町 (ロクケンマチ/現 稲田三丁目)

昔は原っぱで、家が六軒しかなかったのてついたらいいです。今の稲田三丁目は団地がありたくさんの方が住んでいます。(平井友輝さん、香西円さん、青木美樹さん、石崎七海さん、山崎高明さん、横田哲郎さん)

小町 (コマチ/現 本町四、五、六)

小町には問屋や旅館が集まっていました。町がとても長かったので、上小町、中小町、下小町とよびました。(佐藤竜馬さん、遠藤信平さん、梅田隆さん、野崎佑子さん、林昌宏さん、宮澤圭佑さん、八木拳太さん)

馬出町 (ウマダシマチ/現 本町一)

馬出町はお待さんが馬をつないでいた所です。ここから、馬が出たので馬出町とよびました。(北川かすみさん、新井美咲さん、佐藤竜馬さん、遠藤信平さん、奥田涼子さん、久保亜海さん)

下田端町 (シモタバタマチ/現 仲町三)

下田端町は田んぼがそばにあって魚と水がいっぱいあったそうです。また、芸者さんもいた町だそうです。(北川かすみさん、新井美咲さん、佐藤竜馬さん、遠藤信平さん、瀧澤祥子さん、竹内成美さん)

職人町 (シヨクニンマチ/現 大町)

職人町は木工をする人が多く住んでいました。下駄屋、タンス屋の他に、染物屋、飯屋がありました。上職人町は新井側、下職人町は直江津側にありました。(北川かすみさん、新井美咲さん、香西円さん、土屋義雄さん、中村公亮さん、那田智也さん)

●大手町小学校の6年生から

作事町 (サクジマチ/現 大手町)

郭内にある所。もと作事場のあった所。作事場は後に城内に移された。(直原 亘さん)

主水町 (モンドマチ/現 西城町二)

松平中将の老臣、片山主水の屋敷あと。(直原 亘さん)

五分一町一丁目 (ゴブイチマチ/現 幸町)

裏寺町はもと大貫の耕地であったが、松平中将時代に市区改正の時、寺町を建設するため大貫耕地の五分の一を取り上げ、その代わりにこの地を与えた。(直原 亘さん)

稲田町 (イナダマチ/現 稲田二、三)

この里で田を耕していたから、稲田神社ができて、この神社の名前をとって、つけた地名です。(猪又禎人さん)

地域色いろいろ



人は生まれ育った土地の色を好む傾向があるそうです。

あなたの好きな色は何色ですか？

下のカラーチップから5つ選び、○を付けて下さい。

最も多く○の付いた項目があなたの色彩嗜好です。

- a, b, l, m, n, r, s を選んだあなた・・・北海道、東北型色彩嗜好
- l, o, t, j を選んだあなた・・・関東型色彩嗜好
- c, f, h, i, p, q を選んだあなた・・・中部近畿型色彩嗜好
- l, o, s を選んだあなた・・・山陰型色彩嗜好
- c, h, e, k を選んだあなた・・・九州型色彩嗜好
- d, e, g, k を選んだあなた・・・沖縄型色彩嗜好

さて、あなたの色彩嗜好はいかがでしたか？
ばらつきがある人ほど、どこに住んでも大丈夫?!
上越は豊かな自然に囲まれ、四季の移り変わりがはっきりとしています。
季節によって変わるまちの色、あなたも感じてみませんか？

(参考文献:「日本列島・好まれる色 嫌われる色」佐藤邦夫著・青娥書房)
※カラーチップは参考文献をもとに作成

まちは舞台! みんなが主役!

私たち住んでる人や働いている人、公共的な立場の人などがみんな主役になって、まちの舞台をつくり、ひとりひとりのちょっとしたアイデアをみんなで話し、身の回りをきれいにしていくことから始めませんか?



山や森林など自然の美しさの中に突然できた、ちょっとけばけばしい建物! もっと雰囲気があったものの方が良かったのに! →この風景を守る。色合い、高さなど建物の雰囲気を、自然と調和のとれたものにするためにみんなで考えよう!



せつかくの川なのにゴミがいっぱい! どんなことをしたら、みんなが親しめるの? 子供が楽しく遊べるの? 一休みの日にみんなで掃除をし、花や木を植えたらどうかしら?

たとえば…

「まちなみ」をよくしたい。と思うこと、それはすでに景観づくりに参加していることなのです。

景観って何だろう?

まず、景観って何だろう? 近頃、テレビや新聞でも「景観」という言葉がよく耳にするようになりましたね。もう一度ここで考えてみましょう。

生まれ、変わる。(せきゆうこ)

まちかどで、木目肌の卵の上に【生まれ、変わる。】と緑色で大きく書かれているポスターを見かけることがありますか。昨年の10月に上越市景観条例が施行されて、「市民が主役の話せるまちづくり」を呼びかけているのです。

法律とか条例という、何かと細かい規制と手続きがあって、「面倒くさいなあ、そんなもの。」と感じることもあります。以前、私は、歴史的建造物や古いまちなみの多い京都市で、長い間建築設計の仕事をしていました。風致条例、景観条例、古都保存法など、景観形成にかかわる多くの規制があるところです。しかし、人々が良かれ悪しかれ、それを話題にすることか

まちを歩くと… 私たちのくらしの舞台が、いろんな場面に出できます。

- たとえば…
- 海の匂いのする、直江津の海岸に近いまちなみで、ゆったりと歩く買物の帰りの人がいる。
 - 桜咲き乱れるお堀の向こうにまだ雪の残った妙高が見えきらきらしている。

ひとの気持ちが重なってできる景観 ひとが関わってできる景観・ひとがつくってきた景観…

- たとえば…
- この場所の雪が積もっている時がいいなあ。
 - あの場所の、人がいてにぎわっている時がいいなあ。
 - 田んぼの中を電車が通り過ぎていく、もうこの地とお別れだなあ。

そうです。景観は季節によっても、時間によっても、見る人の気持ちによっても違います。

ら始まるのでしょうか。京都でも、色々な「景観論争」があり、人々が声を出すという下地ができてきたと思います。面倒な規制でも、それがなかったら、論争にもつながらなかったかもしれません。

「景観」というものは5年、10年の計画で、明らかな結果が見えるものではないでしょう。それだけに、常々、意識のどこかに置いて考えていかないと、良くならないどころか望ましくない方向にも傾きかねません。後からしまったと思っても、今度はゼロではなく、マイナスから始めなければなりません。

この「景観セミナー」は行政の立場の人々が、従来の縦の枠を越えて、「景

観」をキーワードに「横につながるまちづくり」を考えてもらうための試みです。

「話せる人、話せる場」をつくっていくには、広範囲な視点で考えることが大切だと思います。世代を超えて引き継いできた景観ですから歴史文化に、人を育てるわけですから教育に、まちづくりに直結することですから生活環境、産業育成や社会福祉にも関わってきます。都市計画ばかりでなく、それぞれの分野での考え方をいかにしながら、政策を展開していったほしいと願っています。市民の声が届きやすいように、情報を公開して、長い目で話合いの場を持ってください。

光色サインを考える

「景観デザイン室」ではこんな施策をしています!

景観セミナー

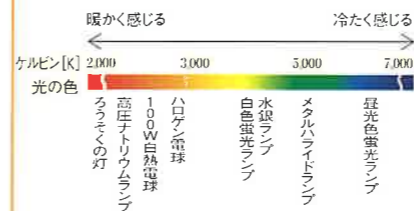


まちのあかりは、光の色、明るさ、まぶしさを変えることによって雰囲気が変わり夜の景観を美しく演出したり、落ち着かせたりすることができる。明るければ良いという時代は終わり、光の量から質へ光のデザインへと転換していくことが大切。

(照明デザイナー 稲葉 裕氏)

光の色を考える(色温度)

光の色は、空間を決める大事なもの。心理的作用もあり、TPOに応じた光の色を考えることが大切。



物の見え方考える(演色性)

光源によって物の見え方に影響を及ぼす性質を演色性といい、この数値が100に近いほど物の色が正しく見える。

まぶしさを考える(グレアをなくす)

グレア…光源そのものやガラスなどの光の反射により、不快なまぶしさを感じる現象。光源の輝度が高いほど、まぶしさを感じる。

目からウロコ!

光を扱う人々は、照明器具のデザイン性を重視するあまり過度な照明計画をしがち。光は空間を演出する裏方であることを常に頭において照明設計が望ましい。明かりの量より質を高める努力を!

EVENT

30周年記念事業 「雁木の魅力再発見!」

市民の提案により、日本一長い雁木をさらに美しく魅力あるものにし、全国にPRしようとする3つのイベントを予定しています。ワクワクするような仕掛けを考えていきますのでみなさんもぜひ参加してくださいね。

色

美しいまちなみをつくるためには鮮やかさ(=彩度)を抑えることが重要。住宅地や歴史性のあるまちなどには「法則(ルール)」が必要で、自然の色を学びまちなみの雰囲気をつくっていくことがヒント。まとまりすぎて個性が感じられない場合はドアや窓枠など建具で変化を持たせる。

(色彩計画家 吉田 慎悟氏)

色に規則性をもうける

色にある規則性をもうけることにより統一感のあるまちなみを作ることが出来る。また、場所の性格によってはリズム感のある色使いも必要。

色相…赤や青などの色みのこと。

明度…明るさの度合い。

彩度…色の鮮やかさの度合い。

トーン…明度と彩度の複合されたもの。色の調子をそろえることにより統一感のある効果が生まれる。

目からウロコ!

まちの色彩計画はある一定のルールが必要。また、色を趣味だけで考えない事。自然の色の変化にも気をくばり、周囲との関係性を考えながら計画を進めていくことが大切。

サイン看板の在り方

サインは大きくなればなるほど、まちなみとの調和が求められるもの一つです。

○何が必要で、何がいらぬ情報なのかを整理して予算の有効な使い方を考える。

○見る人の速度、目線に気を配る。(走る車から読めるのは最低20cm角文字くらい)

○色や形デザインを統一させる。(統一させることでまちのイメージがわかる。)(環境視覚デザイナー 島津 勝弘氏)

目からウロコ!

市内の看板が、こんなにも同じものをいくつも重ねて建ててあったり、あかぬけないものを出していたのかと残念に思った。公共のものからまず整理すべきですね。

8月4日(土)◆雁木ウォッチング

すてきな雁木、ずっと残したい雁木などを見つけ、カメラにおさめます。

9月中旬◆写真コンテスト

ウォッチングで撮影した写真をもとにコンテストを行います。

12月上旬◆雁木フォーラム

雁木についていろいろなデザインを出しあい魅力ある雁木を話し合ってみましょう。

詳細については後日広報等でお知らせいたします。

